

あとがき

2011年3月11日に発生した福島第一原発事故から、今年（2021年）で10年が経過します。事故を起こした原発の廃炉や被害の継続など様々な意味で、今も、事故は収束していません。

この事故のずっと前から、多くの良心的な科学者・技術者をはじめとして、「原発は重大な欠陥を抱えているので、深刻な事故を起こし大量の放射能を放出する恐れがある。その場合には、周辺の住民と環境に多大な被害が及ぶ。原子力政策の抜本的な転換が必要だ」と警告する人々がいました。核燃料の研究者である私も同じ考えを持ち、プルサーマルをはじめとする核燃料サイクルの問題を中心に、一般の方にも講演会などで話してきました。

福島第一原発事故が起きて、私は自身の認識の浅さを恥じました。ここまでの深刻な事故に発展し、これほど被害が広がるとは考えていなかったからです。

事故の後は、それまで以上に、一般の方に話す機会を多くするように努力してきました。私は科学的な事実や論理的な評価をまず話し、それに基づいた自分の考えを示すようにしてきました。分かっていないことは素直に分かっていないということも、心がけてきました。そういう対応が、科学者としての良心に従うことであると信じているからです。

科学の視点に立って、事実や自分の考えを素直に話すことで、原子力に対する立場を超えて（つまり、推進派からも反対派からも、どちらでもない方からも）非難されることがあります。この本の中でも書きましたが、「原発の廃炉は更地方式ではなく、墓地方式による長期保管監視を」、「使用済燃料は乾式貯蔵容器に入れて長期保管監視を」という提案は、福島第一原発事故が起きる前から提起しています。それが、科学的な視点からは妥当と考えるからです。これを提起するたびに、地元の方から叱責される経験を何度もしてきました。

地元の方は、このようにおっしゃるのです。

「電力会社は原発建設にあたり『廃炉にするときには、更地にします』と住民に約束したんだ。だから、廃炉にするなら放射性廃棄物も使用済燃料も全部、よそに運び出してもらわないとだめだ。現地に長期保管するなど約束違反だ」と。

私は、「嫌なものを国民同士で押し付け合うのではなく、国民全体の合意形成のための時間が必要です。安全を確保しながら、時間をかけて合理的な方策を探ってはどうか」と提案してきました。この頃は、「自分のところに長く置かれるのは嫌だけれども、あなたの言うように国民同士で押し付け合うのではダメだとは思う」という声も聞かれるようになりました。

これからのことを真剣に考えなければいけません。「本音では分かっているけど、今は正面から向き合うのはやめて、先送りにしよう」ということが多くないでしょうか。

事故を起こした原発の廃炉は遅々として進んでいません。それでも、国は「2041年から2051年には、廃炉は完了します」というスケジュールを示しています。その頃までにきれいな更地になることを、多くの国民は信じているのでしょうか？

国はこんな約束もしました。「除染で集めた汚染土は、中間貯蔵した後、すべて福島県の外に搬出します」。これを信じている福島県民はどれほどいるのでしょうか？

すでに核燃料サイクルという構想が破綻していることは、原子力関係者の多くが認めることでしょう。それなのに、政府は核燃料サイクルに固執しています。こんな類いのことがたくさんあります。

福島第一原発事故による広範で今後も継続する被害を引き起こし、福島県民をはじめとした多くの国民に大きな危険と不安と実害をもたらした直接の責任は東京電力にあります。しかし、根本は政府の原子力政策・安全規制が科学的に妥当でなかったからであり、事故は歴代政府の責任であることは明白です。

自民党を中心とする歴代政府は、心ある人びとの警告や提言を受け入れないどころか、反対派として敵視し、私の勤めていた日本原子力研究所では職場における差別を引き起こしてきました。原発再稼働、廃炉、放射性廃棄物などの問題で国民の間に大きな不安と深い分断をもたらしているのも、政府の責任です。

福島第一原発事故を受けて、政府の原子力政策は根本的に見直されるべきでした。しかし、見直しが中途半端にしかなされず、結局は、原発依存を続け、重大事故のおそれがあるままで原発の再稼働を認め、プルサーマルによる核燃料サイクルという大変愚かな政策に固執しています。

こうした政府の原子力政策を根本的に見直させることで、原子力の抱える多くの課題、困難を解決していく展望が見えてきます。私たち国民が、政府の政策を変えさせていくのです。

私たちは、もう、本音の議論をしようではありませんか。諸問題に正面から向き合い、国民の間で議論し、合意形成を図ることが求められています。そのためには、科学的な事実とそれに基づく評価を前提としなければいけません。

本書が、国民のみなさんが本音の議論をするための判断材料を提供することになることこそ、著者の望むところです。

(岩井 孝)